

芭蕉元祿事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十七年六月度 入選句（投稿総数千七百九十五・一般投句数五百七十九句）

選者 大橋 庄一郎

特選

更衣掛 軸 額 の 絵 も 替 へ て 大垣市 早崎 美弥子

一般は「更衣」は、季節の推移に合わせて、衣服を替えることをいうが、俳句では、夏の服に替えることをいう。古くは旧暦四月一日、宮中で衣服などを夏ものに替える行事が行なわれていたが、これが一般にも広がったものだが、掛軸額も季節に合わせて、夏の絵に替へて、住居・座敷も夏の準備をされてる様子が良く分かり、夏を迎える愉しさを詠まれたいい句です。

葉桜の かげを 乱して 盃舟 大垣市 佐藤 すみ子

大垣の中心部を流れる水門川の両岸は、桜の名所で川には葉桜のかげがいつばいうつてる。そのかげを関ヶ原合戦で西軍の本拠地になった、大垣城から盃に乗り、堀を渡つて難を逃れたという「おあむ物語」にちなみ、船頭が竿一本で操る全国的にも珍しい盃舟が乱して行くのを詠んで居られ、その盃舟は大変好評で今や大垣の観光名物となり活躍中です。中句のかげを乱してがいい。

国重文軸 見る 人や 誇らしげ 大垣市 三輪 茂

大垣まつりの軸の起源は慶安元年（一六四八）に大垣城下町の総氏神であった八幡神社が大垣藩主戸田氏鉄公によつて再建整備されたおり、大垣十か町が十両の軸を造つて曳回したのが始まりで、その後藩主より三輛軸が下賜され、三六〇年余の伝統を誇り、合せて十三輛の軸が城下町を練り歩き、華麗な祭絵巻が、今回国重要無形民俗文化財に指定され、軸を見る人も引く人も地元民総べての誇りと喜びに溢れた様子をよく詠まれた佳句です。

秀逸

紫陽花を 切れず 眺める 晴 続 く 大垣市 山田 千歌子

絵 天 井 笛 吹 く 天 女 蓮 の 花 大垣市 森川 きよ子

心 太 冷 えて ます と の 置 手 紙 京都府城陽市 谷口 好香

嬰 児 の ね じ り 鉢 巻 春 祭 り 不破郡垂井町 北村 廣美

豆 御 飯 お こ げ は 媪 の 残 り 福 不破郡垂井町 児玉 信子

水 馬 雲 蹴 散 ら して 進 み け り 大垣市 村田 通夫

母 の 忌 や 桑 の 実 熟 る る 頃 哀 し 静岡県静岡市 内藤 知

生 垣 の 躑 躅 散 り 敷 く 古 屋 敷 不破郡垂井町 久保田 紘義

河 川 敷 陣 取 り あ い の 菜 花 咲 く 不破郡垂井町 田中 不二夫

古 里 の 祭 囃 子 を 口 遊 む 大垣市 澤井 国造

入選

青梅が塩梅つかる日々を待つ	大垣市	田林	文
地下出でてさつと五月の風の中	安八郡輪之内町	野村	照子
咲き満ちて力尽き散るぼたんかな	大垣市	鶴田	信子
更衣吾子の腕もも黒さ増す	養老郡養老町	西脇	俊成
風薫る背筋正して打つ一矢	大垣市	今津	正元
ビヤガーデン広告つるし夏めきぬ	大垣市	子安	浪子
水田に抜き足ゆるり鷺のゆく	京都府城陽市	杉本	年雄
羅や透けて襦袢の縫い目見ゆ	揖斐郡池田町	五十川	直靖
段々に山削ずられて美濃は初夏	大垣市	佐竹	余史美
若武者の汗したたらす兜の緒	東京都世田谷区	関戸	信治

入選

声明の和して涼風堂に寄す	大垣市	後藤	ひかる
アメンボウ爪先立ちで四股をふむ	大垣市	谷	彩虹
いつの世も夫婦の絆風薫る	不破郡垂井町	大羽	志津子
土壁の崩れを覆ひ蔦茂る	大垣市	名和	よちゑ
開け放つ古民家の土間風涼し	大垣市	新町	恵子
ふと出合う蜥蜴と暫しにらめっこ	大垣市	川口	千代子
黒板を消して明日より夏休み	大垣市	伊藤	鈴子
溜め込んだ録画dubする五連休	大垣市	齋藤	樹人
行く春や九十の母に悲哀なし	長野県下伊那郡	長沼	まさし
夕薄暑醤油の焦ぐる煎餅屋	神奈川県横浜市	龍野	ひろし

選者吟

母の背を越えて少女の初浴衣

庄 一郎